

ベルツ博士の温泉医学への情熱

松田 博子

京都医学史研究会

明治維新150年の節目の今(2018)、日独医学交流史、明治医学史の視点から、黎明期の日本に曙光と革新をもたらした日本近代医学の父エルウィン・ベルツ博士(1849-1913)の幾多の業績と医の心を回顧する事は、現代的意義と新しい知見を見出す事に繋がるのではないだろうか。ベルツは明治9年東京医学校の教授として27歳で来日。実証的な病理解剖学に基づく臨床を重んじた内科学を伝え、門下に北里柴三郎、森林太郎等多くの日本医学界を牽引する人材を育て道を開いたパイオニアであった。29年間の滞在中、学問領域を超え、人類、人間の営みに対し探求した。

その業績の一つ、温泉医学について日本とベルツの母国ドイツの歴史的、社会的背景について考察してみたい。

『ベルツの日記』前文で酒井シヅ氏は記述されている「また、ベルツは古くから日本にあるものの価値を見出しそれを積極的にとり上げて宣伝した。その一つに温泉がある。日本の温泉の歴史は古く江戸時代に後藤良山がその治療の価値を賞揚したが、ベルツは温泉が日本人の間に長く伝えられてきたのは、そこに必ず医学的効果があるからに違いないという確信を持って調べ始めた。」ベルツは温泉に関する建白書を政府に提出し『日本鉱泉論』3巻が出版された。ベルツは内務省に対し「日本には多くの天然鉱泉があり、その数はドイツ・オーストリアを除く他の国の及ぶ所ではない。日本人は数百年前から医療に利用してきている。しかし我々から見れば改正すべき点が多い」と言っている。

ベルツの温泉医学への情熱は温泉療養所設立の悲願となった。熱心に研究した理由は諸説あるが、病める人々の心の痛み苦しみに寄り添う事の出来たベルツならではのシンボリックな行動で温泉地に土地を購入した。だが町の人々の無理解と誤解を受け、この計画は実らず、批判的証言を日記に残している。

日本各地には他の国に類例を見ない3102ヵ所(2003年調査)もの温泉があり驚く。温泉医学とは言われず「湯治」と観光が中心である。『日本書紀』卷第三十に、さまざまな病に悩む人達が飲泉により治療したとの記録があり、江戸時代には温泉と銭湯ブームを迎え、河合医師は「温泉を君のごとく神のごとく敬い、つつしみ利用するように」と伝えている。

ドイツは、ヨーロッパ全体に分布する温泉地の中、最大の温泉大国である。温泉年鑑によると308ヵ所の療養、保養を目的とする温泉地がある。紀元1世紀頃、居住したローマ人によりローマ風呂がもたされた。17世紀頃、非科学的温泉利用の風習が見直され療養の為の科学的認識がなされた。ドイツでは温泉医がおり近年まで温泉療養に国家の社会保障が適用されていた。心臓病の温泉地、ナウハイムもあり温泉浴マッサージ浴、蒸気浴各種の治療を受け、貴族からブラームス、ベートーベン、モーツァルトまでその昔は滞在し、現在は伝統的な療養から健康への活用に変化している。

ベルツは明治35年第1回日本医学会総会で「予防医学と物理療法が大事である」と強調をしている。ドイツでは伝統医学を自然療法と呼び、物理療法の中の一つに温泉医学があり多くの国民が支持してきた。優れた保養システムの政策を今の日本が応用する事は難しいと思うが、温泉医学の立場から療養温泉地再生と転換の重要性を当時ベルツは胸に抱いていたのである。「健康の助言者、支持者、促進者としての使命がある」と述べているベルツの願いと、地球の天与の恵み、水、温泉、この惑星の環境をできる限り生かしていきたい。超高齢社会を迎えWHOの定義する“健康”が問われる今、人々の願いは古今東西同じである。

ドイツのヘッセン大公は「神の御心により湧き出しこの泉、傷ついた人々の心と身体を癒す」(1910)と石に刻んでいる。